

# 「ノスタルジアと死の感覚:ゴスラー詩におけるワーズワス」

著者	吉川 朗子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	50
号	7
ページ	95-108
発行年	1999-12-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001498/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001498/</a>

# 「ノスタルジアと死の感覚： ゴスラー詩におけるワーズワス」<sup>i</sup>

吉川 朗子

1798年秋から1799年春にかけてのドイツ滞在は、ワーズワスの詩人としてのキャリアにとって重要なものとなった。特にコールリッジと別れてからゴスラーという古い町で、交わる人もなく、妹と2人寒さのために家の中に閉じこめられていた孤独な冬の日々は、ワーズワスに故郷そして子供時代へのノスタルジアをかき立て、『序曲』(*The Prelude*)の骨格となる部分を執筆させるに至った。ドイツからの帰国後、ワーズワスは故郷の湖水地方へ帰ってグラスミアに住居を定めることを決意するが、ここにもこの異国の地で感じたノスタルジアが関わっているであろう。

しかしゴスラーで書かれたのは郷愁に満ちた詩ばかりではない。「ルーシー詩篇」('Lucy Poems')や「マシュー詩篇」('Matthew Poems')などを彩る死の感覚(sense of death)も、ゴスラー詩の特色のひとつである。『序曲』で回想される子供時代にも死のイメージが所々に影を落としている。この死の感覚というのは、『墓碑銘論』(*Essays upon Epitaphs*)、「兄弟」('The Brothers')、「マイケル」('Michael')、「逍遙」(*The Excursion*)などグラスミアに移ってから書かれた作品においても重要になってくるが、これらにおける死の感覚とゴスラー詩におけるそれとでは少々性質が異なるようである。1810年に書かれた『墓碑銘論』に'a community of the living

---

i 本稿は、イギリス・ロマン派学会第25回全国大会における口頭発表原稿に、若干の修正を加えたものである。

and the dead<sup>ii</sup> という言葉が出てくるが、このころ書かれた作品では、共同体がその死者たちの思い出を語り継ぎ守り継いでいくという感覚、死者と生者はつながっており、そして死者の思い出を語り継ぐことで生きている者たちもひとつにまとまるという感覚が見られる。こうした sense of community というものが、ゴスラー詩には欠けているのだ。ゴスラー詩においては、死はもっと個人的で私的で孤独な出来事として扱われ、深い喪失感に彩られている。そしてそれはノスタルジアに伴う喪失感にも通じているようだ。

以下の論考では、ゴスラー詩における死の感覚とはどのようなものなのか、そこにはノスタルジアによって呼び起こされた過去の思い出、あるいはノスタルジアに伴う喪失感、即ち失われた過去への思慕の情といったものがどう関わっているのか、またグラスミアへの帰郷という出来事によって死の感覚がどう変わるのかについて考えてみたい。

最初に引用する詩は、ワーズワス兄妹がドイツから帰国、さらには湖水地方に帰郷した後に、ゴスラーにいたときのことを振り返って書かれたものであるが、ここには故国に対する郷愁、愛情が素直に表現されている。

I travell'd among unknown men  
In lands beyond the sea:  
Nor, England did I know till then  
What love I bore to thee.  
'Tis past — that melancholy dream!  
Nor will I quit thy shore  
A second time; for still I seem  
To love thee more and more.

---

ii *The Prose Works of William Wordsworth*, Vol. 2., eds. W. J. B. Owen & Jane Worthington Smyser (Oxford: Clarendon Press, 1974), p. 56.

( 'I travelled among unknown men', 1-8 )<sup>iii</sup>

詩人はここで故郷からしばらく離れたことによって故郷に対する自分の強い愛情に気づいたと述べている。ワーズワスがイングランドを離れたのはこれが初めてではないが、ドイツにおける滞在はことさら異郷にいるという感を強めたようだ。'unknown men', 見知らぬ人々の間を旅したという言葉が詩人の孤立感を伝えている。ここには空間的なノスタルジアが表されていると言える。

ノスタルジアとは、*OED*によれば 'A form of melancholia caused by prolonged absence from one's home or country; severe home-sickness' ということ、もともとは家、故郷へ帰りたいという強い願いのことを指した。元来病気の一種、憂鬱症の一種として扱われていたようだが、これはやがて空間的にだけでなく時間的に隔たっているもの、過去に対する思慕の情にも使われるようになる。18世紀の終わり頃から19世紀にかけては、失われたよき時代、失われた子供時代への愛惜の情、思慕の情を歌った詩が流行したという。たとえばゴールドスミスの「廃村」('The Deserted Village'), またコールリッジの「オッター川へ」('To river Otter') などが例として挙げられるだろう。<sup>iv</sup>

ノスタルジアというのは、従って、必然的に喪失感、欠落感を伴う。時間的、空間的に遠く隔たってしまったものに対する恋慕の情がノスタルジアであり、それは断絶感、孤立感、あるいは喪失感と切り離せないものであると言える。ではゴスラーにいたワーズワス兄妹が感じた孤立感とはどういうものだったのかというと、一方では周囲の人々との交流 (human commu-

iii 【抒情歌謡集】(*Lyrical Ballads*) からの引用には、"*Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*, eds. James Butler and Karen Green. (Ithaca: Cornell UP, 1992) を用いる。なおこの詩は、もともと【抒情歌謡集】第3版(1802)のために書かれたが、結局これには含まれず、1807年にはじめて出版された。

iv ノスタルジアという概念の定義、歴史については、Ann C. Colley, *Nostalgia and Recollection in Victorian Culture*, (London: Macmillan, 1998) を参照した。

nity) から隔絶された状態を指し、他方では、周囲の自然と交わる機会を持っていない状態 (communion with nature からの疎外) から来たものと思われる。

We have gone on advancing in the language ... in tolerably regular progress, but if we had had the advantage of good society we should have done much more, .... At present ... the weather is not very favourable for such a plan, as though it is very good for walking the set distance which we have to go, yet it is not sufficiently inviting to induce us to ramble much about.<sup>v</sup>

妹ドロシーのこの手紙からは、彼らがゴスラーの人々の共同体には受け入れられなかったこと、またあまりの寒さのため、野原や森を散歩して自然と十分交わることもできなかったことが窺われる。

こうした孤立感、孤独感は、一方では故郷、すなわち自分が帰属できる場所、自分たちを受け入れてくれる共同体、‘unknown men’ でなく ‘known people’ のいる場所にありたいという願望を募らせていくことが予測されるが、これについては後述する。まずは、屋内に閉じこもりがちだった孤独なゴスラー暮らしの中で、自然との交流が可能であった過去、子供時代へのノスタルジアへと向かっていった様子を見てみたい。

『序曲』でもっともノスタルジックな箇所といえば、‘Was it for this ...’ で始まるあのパッセージ (*Two-Part Prelude*, I:1-26)<sup>vi</sup> であろうか。そこには、‘the fairest of all rivers’ (2), ‘thou, /O Derwent’ (6-7), ‘my “sweet birth-place”’ (8), ‘thou beauteous Stream’ (8), ‘Beloved Derwent!

v “Dorothy’s letter to Christopher Wordsworth” (Goslar, Feb 3<sup>rd</sup> 1799) from *Letters of William and Dorothy Wordsworth*. ed. Ernest de Selincourt. *The Early Years, 1787-1805*. Rev. Chester L. Shaver. (Oxford: Clarendon Press, 1967)

vi 本稿では、1798年から1799年にかけて書かれたいわゆる『二部序曲』 (*Two-Part Prelude*) を用いる。引用には、*The Prelude, 1798-1799*. ed. Stephen Parrish. (Ithaca: Cornell UP, 1977) を用いる。

fairest of all Streams!’ (16) ‘thy silent pools’ (18) など、二人称の呼びかけや故郷を美化する言葉が随所に見られ、故郷の川や湖に対する限りない恋慕の情であふれている。また、そこで野生児のように遊びまわっていた幼い自分の姿を懐かしむまなざしが感じられる。川のせせらぎは少年の夢の中へと流れこんでくる。幼い詩人の心と自然界との交流の様子がノスタルジアをこめて美しく描かれた場面と言えるだろう。

しかし続けて思い出されるのは、必ずしも幸福な場面ばかりではない。詩人は自然界との交流が可能だったころを思い出し、そこにこそ自分の詩人としてのキャリアの原点を見出していこうとするわけだが、具体的にどのような場面が思い出されるかといえば、エスウェイト湖で溺死体が引き上げられるのを目撃する場面だったり、馬で遠乗りした際に連れからはぐれて絞首刑の跡に出くわす場面だったり、父親の死が近づいているのも知らずにクリスマス休暇に家から迎えに来る馬車を待ちわびたときのことだったりする。ポート盗みのエピソードでは、自然界に潜む何かえたいの知れぬ存在が詩人の心に付きまとい離れない。ノスタルジアは必ずしも快い思い出ばかりでなく、恐怖や不安と結びつく出来事をもよみがえらせる、とアン・コレーは指摘しているが、これはワーズワスの場合によく当てはまる。イギリスへ帰ってから書かれた第二部には、自然界との幸福な交わりの例がいくつも挙げられているが、ゴスラーで書かれた第一部で描かれるのは、どれも荒涼とした、ワーズワスの言葉を借りれば ‘visionary dreariness’ (I: 322) と呼ぶべき風景ばかりだ。ゴスラーでの communion with nature の欠如は詩人を自分の子供時代へと向かわせたが、そうして呼び起こされた過去の場面の多くはなぜか不安感や死のイメージに満ちているのである。これは雪に閉ざされた孤独なゴスラーでのワーズワスの心理状態を反映しているとも言えるのだろうが、しかし、ゴスラーでの孤立感と子供時代のそれとでは違いがある。少年時代にあつては human community という観点からは孤独であっても、自然と

vii *Nostalgia and Recollection in Victorian Culture*, p. 209.

の交流は確保されていたからだ。ゴスラーにはその両方がない。

自然との交流ということでひとつ見ておきたいのは、「一人の少年がいた」(‘There was a Boy’)である。これはゴスラーで思い出された故郷の風景の中では、自然界と少年の心との幸福な交流が描かれている数少ない例のひとつであるが、ここにも sense of death が影を落としている。これは1800年版の『抒情歌謡集』の中で単独の作品として発表されるが、内容から言ってもその成立過程<sup>viii</sup>から言っても、『序曲』の一部と考えていいだろう。この詩では、少年が一人湖畔にたたずみ向こう岸のふくろうと指笛で交流するさまが描かれる。木々や岩山、空、そして湖畔にたたずむ少年の影を湖は深く映しとり、そしてそれらのすべては少年の心の奥深くへと運ばれる。こうした少年の心と自然界との交流が描かれた後、彼は幼くして死んでしまったということが記される。少年が自然と交感する能力を持つ子供時代を体現しているとするならば、この能力もまた少年とともに葬られることになる。草稿のひとつ<sup>ix</sup>でこの体験が一人称で綴られていたことを考えると、少年の墓を詣でて物思いに耽る詩人は、自然との一体化が可能だった自分の子供時代へのエピタフを手向けているようにも見える。ノスタルジアは喪失感を伴うと先ほど述べたが、ワーズワスの場合この喪失感 sense of death に伴う喪失感にも結びつきやすいと見えるのである。

さて、上述のように『序曲』に描かれる子供時代の体験の多くは、孤立感、孤独感に支配されている。子供時代は、自然との交流、communion with nature が可能であった半面、human community からは切り離されたものであるのだ。こうしたことは、「ルーシー詩篇」や「マシュー詩篇」に表されている sense of death の孤独感、喪失感とどう関わってくるのだろうか。「一人の少年がいた」が生前の少年が自然と交わる能力を持っていたことを記しているとすれば、「ルーシー詩篇」では、ルーシーという一人の少女が

viii 『序曲』の最初の草稿 MS、JJ にこの詩の原型が見られる。また、後に1805年版の『序曲』第五巻にこの詩は組み込まれることになる。

ix MS、JJ

死後も自然界との交流が続けていることが記されている。「ルーシー詩篇」において死、そして自然との交流はどのように描かれているのだろうか。

1800年版の『抒情歌謡集』第二巻でいわゆる「ルーシー詩篇」の最初に登場するのは「不思議な心の高まりを知った」(‘Strange fits of passion I have known’)である。これは馬に乗って恋人に会いに行く途中の男が、月の動きをじっと見守っていて、不意に愛する人が死んでしまうのではないかという不安に襲われるという内容の詩であるが、恋人に会いたいという強い願いが恋人の死という連想を招くこの感情の構造は、『序曲』の中に描かれた‘spots of time’のひとつ、クリスマス休暇を前に家からの迎えの馬車を待ち焦がれ街道の先をじっと見つめていたという経験を、その休暇中に起きた父親の死という不幸な出来事と結びつけてしまう感情の構造と似てはいないだろうか。あのエピソードでは、少年だった詩人は、早く家へ帰りたいという自分の強い願望(‘anxiety of hope’, ‘desires’)が父の死という罰を与えられたのだと解釈する。つまり、強い郷愁が愛する人の死という喪失感と結び付けられる。ゴスラーにおいて故郷に対する強いノスタルジーを抱いた詩人の脳裏にも、再び愛する人の死を経験するのではないかというかすかな不安がよぎったのかもしれない。「まどろみが我が心を封じたれば」(‘A slumber did my spirit seal’)についてコールリッジが、‘Most probably, in some gloomier moment he had fancied the moment in which his Sister might die.’<sup>x</sup>と評していることが興味深く思い出される。

さて、コールリッジが‘a most sublime epitaph’<sup>xi</sup>と呼んだこの「まどろみが我が心を封じたれば」では、死んだ彼女は人間界を離れ自然界の一部となることが記される。すなわち、彼女は human community を離れ、 communion with nature を達成する。

---

x *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge. Vol. I* ed. Earl Leslie Griggs, (Oxford: Clarendon Press, 1956), p. 479.

xi *Ibid.*



Roll'd round in earth's diurnal course

With rocks and stones and trees!

(‘A slumber did my spirit seal’, 7-8)

しかし死んで人間界を離れるという言い方は正しくないかもしれない。彼女は生きているときから、岩陰に人知れず咲くスマイレ、ただひとつぼつんと輝く星にたとえられるなど、人間社会との交渉もなく、自然界の一部として生きてきたのだから。

A Maid whom there were none to praise

And very few to love.

(‘She dwelt among th’untrodden ways’, 3-4)

人々にとっては、彼女が岩陰にしようが草葉の陰にしようがさして変わらない。彼女は人知れず生きて、人知れず死んでいくのだ。共同体の中で死者の墓と思い出とが守られていくとする『逍遙』や「兄弟」の世界とはなんと違うことか。ここでは少女の死が意味を持つのは、ただ語り手である詩人にとってだけなのである。

She *liv'd* unknown, and few could know

When Lucy ceas'd to be;

But she is in her Grave, and oh!

The difference to me.

(‘She dwelt among th’untrodden ways’, 9-12)

またルーシーは共同墓地に埋められていない。「彼女は人里離れて暮らした」には確かに ‘Grave’ という言葉が出てくるが、これは誰にも訪れられ

ることのない墓であって、スマレの花をそっと見守る岩と大して変わらないように思われる。『逍遙』や「兄弟」などに登場する死者たちはみな教会墓地に眠っている。すなわちコミュニティーの中に受け入れられている。彼らの墓には詣でる人々があり、彼らの思い出についてはそれを守る人々がいる。それに対し、ルーシーの生死については気にかけるものは誰もいない。彼女は人間のコミュニティーの外にいるのだ。

ここで問題なのは詩人の存在である。彼だけがルーシーの死を悲しみ、孤独のうちに取り残される。いったい詩人はこれらの詩の中でどのような位置にいるのだろうか。彼は人間界からも離れており、共同体の一員としてルーシーの墓と思い出を守っていくという方法をとることができない。かといってルーシーと自然界との親密な交わりにも与ることはできない。human communityからも、死者と自然界との communion から切り離され、なんとも宙ぶらりの状態である。ゴスラーにおいて、雪に閉ざされ、他の人々との交流を断って、ドロシーと二人孤独のうちに過ごす詩人の心理状態を反映しているとも言える。

She died and left to me

This heath, this calm and quiet scene,

The memory of what has been,

And never more will be.—

(‘Three years she grew in sun and shower’, 39-42)

ここには、失われたものに対する思慕の情、かつてはあったが今はないものに対する深い喪失感、孤独感など、ノスタルジアに近い気持ちが表明されている。「かつてはあったが二度と戻ってこないもの」とは何か。それは一義的にはルーシーと過ごした日々を指すのだろうが、それだけではないかもしれない。ルーシーは言わば human community を離れ、 communion with

nature に与る詩人の子供時代を体現している。この詩での喪失感、そうした自然界との交わりにもはや参加することができないという喪失感をも表していると言えるかもしれない。そしてその喪失感、他の人々、共同体によって共有されることもなく、語り手一人が孤独に抱え込むことになる。

「マシュー詩篇」においても、これらを支配するのはこうした喪失感と孤立感である。マシューは、「ルーシー詩篇」で後に取り残されて途方に暮れる語り手と同じ立場にいる。「二つの四月の朝」(‘The Two April Mornings’) は、愛する娘の死を嘆くマシューの姿を描くが、詩の形としては回想詩の形をとる。詩人は愛娘を失ったマシューの悲しみを直接描くのではなく、彼に三十年前の奇跡のような光景を振り返らせる。マシューはノスタルジアをこめて東の空を見つめ、三十年前の四月のある日のことを思い起こす。その日彼は娘の墓のそばで立ち止まり、幼くして亡くなった娘に対する恋慕の情を深めたのだが、そのとき彼は一人の少女を見出す。それはまるで墓の中から娘がよみがえったかのような、奇跡が起きたかのような瞬間である。あるいはこれはマシューの強い願望が生み出した幻影だったのかもしれない。しかし彼はこの奇跡を自ら拒絶する。輝かんばかりのその少女をじっと見つめていたマシューは結局、この子は死んだ娘の代わりにはならないと考える。死者はよみがえってはこない。死者と生者の世界は分断されている。死者はただ遺族に孤独感、空虚感を残し、そしてその喪失感、他のものでは埋めることができない。

ところで ‘There came from me a sigh of pain’ (53) と言うとき、マシューは二重の喪失感を味わっている。ひとつは死んだ娘は二度と自分のもとへは戻ってこないということ、もうひとつは、三十年前の奇跡のような出来事は二度と訪れないということから来る喪失感である。二つの四月の朝はそっくり同じに見えるけれども、二つの間には埋められぬ大きな隔りがある。同じ四月が戻ってきても、娘の生きていた四月、そして墓地の傍らで美しい少女と出会った四月、あるいはさらに、マシューが生きていた四月も、

二度と戻ってはこない。この詩では愛娘を亡くしたマシューの悲しみは、二度と戻らない過去に対するノスタルジアという形で表されるのだ。

「泉」(‘Fountain’)でも、マシューはノスタルジックに過去を振り返り、古いのもたらしたもの、すなわち子供たちに先立たれるという不幸を嘆く。ここでも、川のせせらぎは昔と同じなのに若いころの楽しい日々は戻ってはこないという、やはり失われた過去に対するノスタルジアの形でマシューの悲しみは表現されている。そして少年だった詩人の同情から出た「僕があなたの子供代わりになろう」という申し出もあっさり拒絶される。マシューの悲しみ、孤独感は語り手である詩人に共有されることはない。「二つの四月の朝」でも、マシューは詩人がそばにいることなど忘れたかのように遠く東の空を見つめ、三十年前の思い出を語り出すだけで、語り手に同情や共感を求めなかった。死者と生者の関係は当該者の間だけのものにとどまり、他人あるいは共同体の中で共有されるものにはならないのだ。同じく子供を失った父親を描いた詩でも、1800年にグラスミアで書かれた「子を亡くした父親」(‘The Childless Father’)では、子供を亡くした老人の悲しみは共同体の日常的な営みの中で少しずつ紛れていくことが窺われる。「マシュー詩」にはこうした共同体の存在が感じられないのだ。

このようにゴスラー詩においては、死は個人的で私的で孤独なものとして捉えられがちだ。それに対して、『逍遙』や「兄弟」,「マイケル」など故郷グラスミアへ帰ってから書かれた詩においては、死者は教会墓地、すなわち共同墓地に埋められる。そして教会は死者と生者が共に憩う場所、生者と死者のコミュニティーの中心地として捉えられ、グラスミアの谷で死んでいった人々の思い出は、グラスミアの谷に遺された人々のコミュニティーの中で守られることが記されている。

確かに、ゴスラー詩の中でも「ルーシー・グレイ」(‘Lucy Gray’),「デン人の少年」(‘A Danish Boy’)などのように、コミュニティーの存在が感じられる作品もある。「ルーシー・グレイ」ではルーシーは両親と暮らして

おり、また行方知らずになったときには彼ら在必死に探してくれるわけで、決して一人ぼっちではない。また彼女の話は人々の間で語り継がれており、彼女はコミュニティーの中へ受け入れられたと言っていいのかもしれない。しかし彼女の物語は共同体内で語られているが、彼女自身は共同体の中へは受け入れられていない。彼女には墓がない。教会墓地の中に眠るのでなく、野山をさまよう、しかも決して振り返らないものとして描かれている。彼女は共同体の外の存在として描かれているのだ。「断片」、後に「デーン人の少年」とタイトルを与えられる作品でも、ここにはデーン人の少年の亡霊が昼間谷をさまよう姿が描かれているが、彼は完全に自然の中の存在として描かれる。(彼は竖琴を奏でて鳥のように歌うが、それは動物たちにしか聞き取ることにはできない。)この詩では墓も出てくるが、これもまた共同墓地、教会墓地にあるのではなく、人々の近づかない窪地の木の下にひっそりと盛り土がなされているだけのものだ。確かに彼の物語はウエストカンバーランドの民間伝承として語り継がれてきたのだったが、彼自身は、その出自からも推察されるように、共同体の外の存在として扱われるのだ。

死者が共同体の中へ受け入れられるには、やはりグラスミアへ帰ってからの詩まで待たねばならない。ワーズワスの死生観、コミュニティー観には、どうも帰郷という出来事が関わってくるようである。そこで帰郷の様子を記した「グラスミアの我が家」(‘Home at Grasmere’)を最後に少し見おきたい。

ゴスラーからイギリスへ帰り、半年ほどおいてグラスミアへ向かう途中、ワーズワス兄妹はヨークシャーのリッチモンドの近くで「鹿跳びの泉」と名づけられた場所を通りかかる。ここには、昔猟師に追われた鹿が逃げに逃げて自分の生まれたところである泉へ戻ってきて、最後の跳躍を試みた後そこで息絶えたという物語が伝えられていた。「グラスミアの我が家」には、この場所を通ったときこれからグラスミアへ帰郷することによって訪れる幸せな日々を予感したということが記されている。そこは猟師に追われた鹿が牡

絶な最後を遂げた悲しい場所であり、風景も鹿の死を嘆くかのようにわびしいものであったという。それなのに、そのような場所で幸福な未来を予見するとはいったいどういうことなのか。おそらく詩人は、鹿が自分の生まれた場所に戻ってきて息絶えたということに感銘を受けたのではないだろうか。そして、自分もまた生まれ故郷に帰り、死ぬならばそこで死にたい、そうすればグラスミアという場所、そしてそこにできた共同体がいつまでも自分のことを記憶にとどめていてくれるであろうと思ったのかもしれない。「グラスミアの我が家」の冒頭には、少年のころたまたまグラスミアの谷を通りかかったときに「この谷で暮らし、この谷で死ねたなら」と子供ながらに願ったことが記されている。詩人はその願望を叶えに故郷へ帰るのだ。

ワーズワスのグラスミアへの移住は社会からの逃避だという見方もあるが、ロンドンやヨーロッパなど外の社会で 'unknown men' の中で孤独に生きてきた詩人が、故郷を持ちたい、土地と住人とが作る地域共同体の中で、人々とのつながりの中で生きていきたいという決意が、この移住にはあるように思われる。「グラスミアの我が家」には、グラスミアという谷あいのコミュニティの中へ入っていこうとするワーズワス兄妹、地域共同体の中で生きていこうとする兄妹の姿が描かれていると思われるのだ。

No, we are not alone; we do not stand,  
My Emma, here misplaced and desolate,  
Loving what no one cares for but ourselves.

.....

.....We do not tend a lamp  
Whose luster we alone participate,  
Which is dependent upon us alone,

---

xii William Wordsworth, *Home at Grasmere*. ed. Beth Darlington. The Cornell University Press. (Ithaca: Cornell University Press, 1977), MS. B

Mortal though bright, a dying, dying flame.

(‘Home at Grasmere’ 646-48, 655-58)<sup>iii</sup>

グラスミアへの移住後一年以内の間に「マイケル」、「兄弟」、「子を亡くした父親」など、グラスミアの谷に生き、そして死んでいった人々を主人公にした詩を立て続けに書くあたりにも、詩人の決意は見られるように思う。これらの詩では、死もまた孤独なものでなく、コミュニティーに共有されるものへと変わっていく。

Gosラーにいたワーズワスは、human communityからも離れ、かといって子供時代のような communion with nature に浸ることもできない。こうしたことが詩人を communion with nature が可能だった子供時代に対するノスタルジアへと向かわせたのだろうが、そうして思い出された過去というのは、必ずしも幸福なものばかりでなく、sense of death が影を落とし、孤独感、孤立感に支配されたものだった。こうしたことが Gosラーで書かれた「ルーシー詩篇」や「マシュー詩篇」の孤独感にも反映されていると思われる。しかし他方では、Gosラー詩にも人間のコミュニティーへ向かっていこうとする動き、死をコミュニティーの中へ受け入れていこうとする動きがないわけでもない。「寺男へ」(‘To a Sexton’) では共同墓地というものが描かれ、また「詩人の墓碑銘」(‘A Poet’s Epitaph’) でも墓を訪れる複数の人間が想定されている。‘First learn to love one living man; / Then may’st thou think upon the dead’ (3-4) とあるように、生きているもの同士の間のつながり、そして生者と死者との間のつながりの可能性が示唆されている。こうした死者と生者が作る共同体という考え方が本格的になるのは、先ほども述べたようにグラスミアへ帰ってからだだが、Gosラーでの孤独な状況はワーズワスに人恋しさを募らせ、human community へ向かわせるきっかけにもなったのかもしれない。ともかく、Gosラーにおけるノスタルジアは、故郷へ、そして地域共同体における暮らしという新しいテーマへと、ワーズワスを導くことになるのである。